

北欧保育短信(四)

飯田 泰造

子どもが絵を描いたり、ものを形づくったりする活動、それらは子どもの遊びであり、また遊びから得られたものの表現であるからには、子どもにとって遊具はとても大切であることは申すまでもありません。今回はその遊具の中で特に外遊びの遊具について、これまでに見てきたものを紹介することにしましょう。

ウメオー (Umeå) で、先生たちのくふうした素朴な木材をくみ合わせた遊具を見

て、私たちもぜひ保育者の手でくふうし、遊具を作ろうではありませんか、と申しましたが、それは大切なことだと思えます。

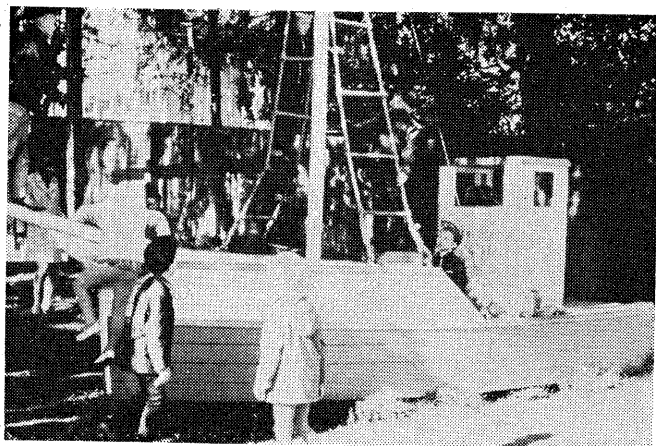
木材の豊富なこの国では、冷たい感じのある金属製のものを極力さけた、したしみのある木材遊具をしばしば見かけました。

それはこれまでに見てきた他の北欧の二つの国、デンマーク、フィンランドでもそう

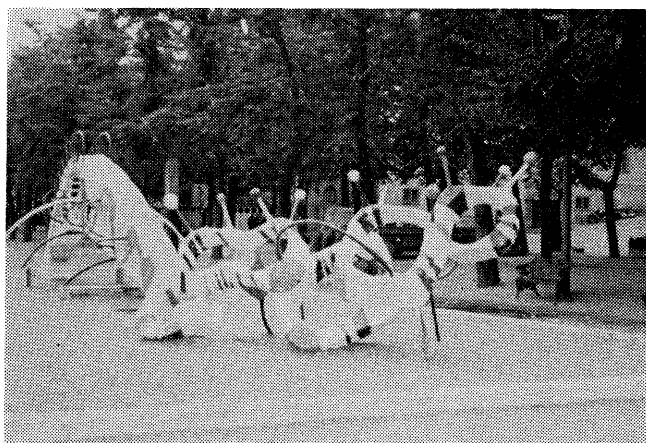
でしたが、私たちにも「これならやれるな」と思うものが、ずいぶんありました。時に



自然木のままの遊具



フィンランドの幼稚園にあった
「船」



ストックホルムの
プレイスカラプチュア

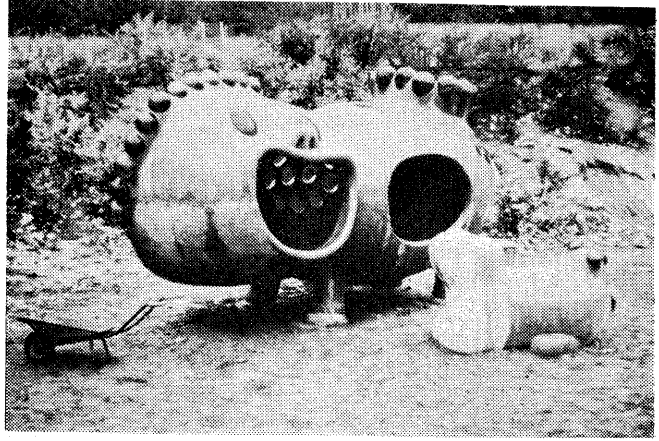
はただ、切り出してきたばかりの自然木を
ねかせたままのものもありましたが、子ど
もにとってはかえって親近感があるのか、
とてもよく遊んでいるのを見かけました。

フィンランドの幼稚園で見た「船」は大
へん写実的なものですが、子どもたちが心
ゆくまで楽しんでいるのを見て、こんなも
のもいいなと思いましたが、ストックホル
ムではさすがに、新しい感覚に立っていたら
いろいろな遊具を目にすることができました。

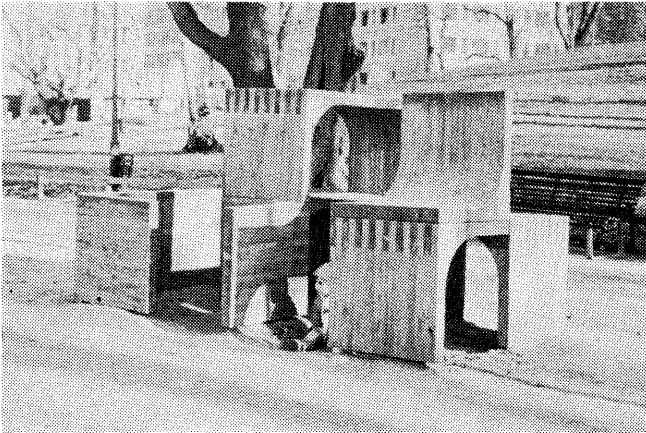
プレイスカラプチュア (Playsculpture)
は、子どもが、自由に想像をたくましくし
て遊ぶことのできる遊具で、日本にもこの
頃、ずいぶん見かけるようになったもの
の、公園だけにとどまらず、幼稚園や保育
園の庭にも欠かせないものであらうと思っ
ます。

それは、ただ運動するための遊具、つま
り運動具であるにとどまらず、夢や想像を
かきたてるようなものをもということだ

ストックホルムの
プレイスカラブチユア



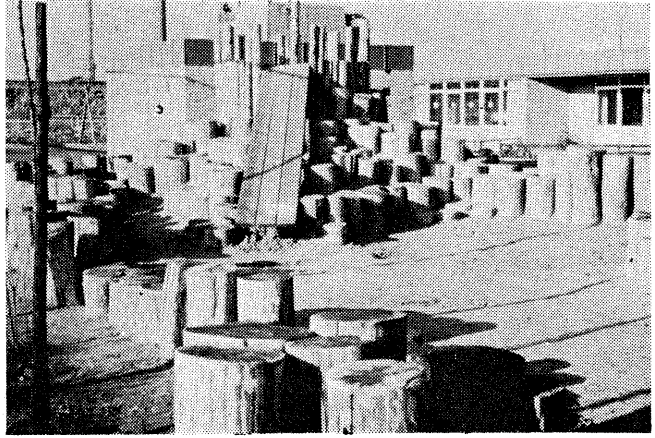
ストックホルムの
プレイスカラブチユア



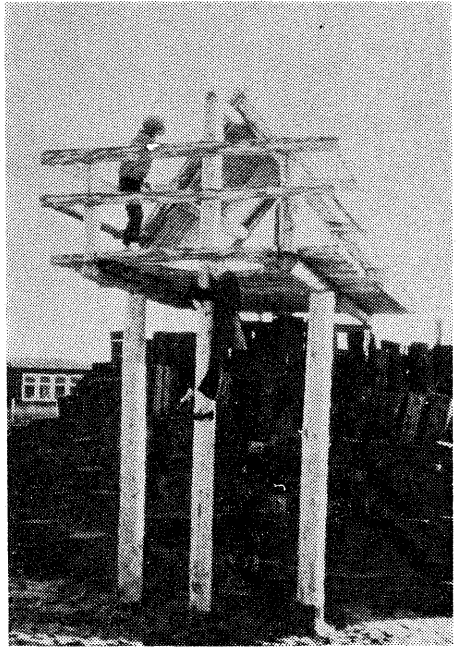
す。

マルメー (Malmö) 市は、スウェーデンのほぼ南の端に位置する町ですが、ここは学校建築について、意欲的にいろいろな試みをしているので有名です。私は、そこで幼児教育の施設にもなかなかおもしろいものを見ましたし、また、室外の遊具にいくつかの大胆な試みを見ました。

木材を実に豊富に使った「かくれ家」や「船」や冬の「雪合戦のとりで」などもありました。このことでは、デンマークはもう三十年も前から playground の運動を展開していることで知られています。コペンハーゲンのフローベルセミナリー (Froebelseminariet) という保育学校のヘッドマスターであるシクスガード (Uens Sigsgaard, Mr.) は世界中にこの運動をおし広めた人として有名ですが、私は一日先生の案内でコペンハーゲンのプレイグラウンドを見せてもらうことができました。



スウェーデン
マルメーの大きな遊具

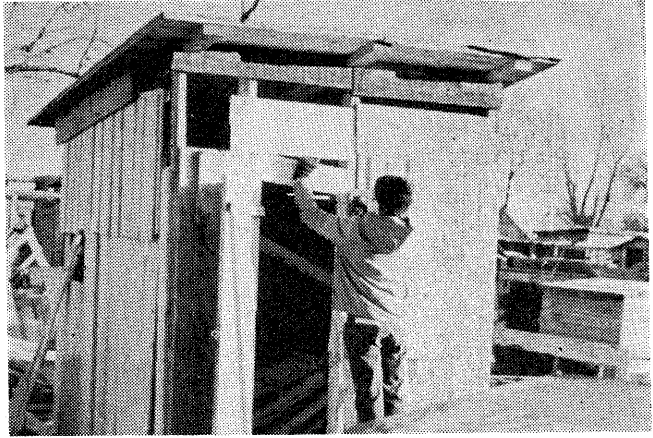


スウェーデン
マルメーの雪合戦のとりで

もう寒い時期に入っているのです、子どもたちが、十分な活動をしていなかったことは残念でしたが、かなり広い地域が、全く子どもたちだけの自治的な活動にまかされていて、工場や国からもらったたくさんさんの素材（主として木材）で、思い思いに小さな家をたくさん作り、そこで遊ぶのです。別棟では、牛や山羊を飼っていてそれを世話したり、また、造形の部屋では、それぞれが製作をしたり、またパン作りなどをし

て、それは楽しそうに、また真剣な面もちで活動をしていました。このような施設が、コペンハーゲンのあちらこちらだけでなく、国中にあるというのです。それは何ともし切った活動でしょう。そして子どもへの信頼しきった愛情でしょう。

ここまで徹底してやってもらっている子どもたちの幸せを考えずにはいられません。また、いくつかの保育所や幼稚園も訪ね



デンマークのブレイグラウンド

思い思いの家をつくる



デンマークのブレイグラウンド

自分たちでつくった小さな家であそぶ

ることができましたが、デンマークは、ほんとうによく室外の遊具が研究され、また改良されているのを見て、この国の保育が創造的であることに定評のある一つの原因が、そこにもあると感じました。

カールベルイの保育園ではたくみに酒樽を利用した遊具がありました。ここはあるビール会社の付属施設でした。また、町のあちこちには、たぐさんの小遊園を見かけ、そこには必ずといってよいほどくふうをこらした遊具が見られ、市がこのために払っている犠牲の大ききをも思ったことです。

日本にも、もっとたぐさんの遊びの場——それはよく子どもの発達や心理を考えたものが与えられ、また遊具がくふうされ、開発されるようにと思われました。そして、そこに保育者の一つの課題もあるように思うのです。

一九七〇年一月三十日 スウェーデンにて